View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

長濵拓磨＿文学研究科

博士論文要約

遠藤周作研究―「歴史小説」を視座として―

本学位申請論文『遠藤周作研究』は、「歴史小説」を視座として総体的に遠藤周作の文学活動の見直しを図る試みである。従来の先行研究において遠藤周作の文学的営為は、「純文学」と「軽小説」の二つに分けて論じられてきた。中でも「歴史小説」は「軽小説」に区分され、評価も低く、他の遠藤文学との関わりもあまり論じられることはなかった。そうした現状の中で、本論文では「歴史小説」を「軽小説」だけではなく、「純文学」を代表する『沈黙』や『侍』なども含めて分類して、「歴史小説」を遠藤文学の総体的な枠組みの中で考察した。

本論文では、序論で遠藤の＜歴史＞観と＜小説＞観が遠藤文学の根幹に関わるものであることを示し、本論で第一部、第二部、第三部、第四部の四部構成の下に十四章から成っている。

第一部は「「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―」をテーマとして、「手記」と「トポス」というキーワードをめぐる作家論と、『黄色い人』、『海と毒薬』の作品論を収めている。対象となるのは、「神々と神と」で評論家として出発した遠藤がフランス留学を経て「アデンまで」で作家としてデビューし、「白い人」による芥川賞受賞、『海と毒薬』で作家としての地位を獲得していくまでの時期である。この時期のほとんどの作品が、「手記」形式であり、さらに遠藤の歴史趣味の出発点である〈廃墟〉という「トポス」などの様々な問題が形成された。これらの問題は、遠藤の「歴史小説」と深く関わるものであり、とりわけ、『黄色い人』と『海と毒薬』にはその萌芽を見ることができる。

第二部は、「「歴史小説」―「切支丹物」の世界―」をテーマとして、「弱者」と「強者」をめぐる作家論と、『沈黙』の作品論を収めている。『最後の殉教者』に始まる遠藤の「歴史小説」が芥川龍之介の「切支丹物」の系譜に連なるものであり、その中心として「弱者」の問題と「強者」の問題が存在していることを、具体的な作品に即して明らかにした。とりわけ、「強者」を代表するペドロ岐部と『沈黙』との深い関連を論証した「第二章　遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（一）―『留学』『沈黙』を中心として―」では、H・チースリク『キリシタン人物の研究』という資料の新たな発見があった。

第三部は、「「歴史小説」―「評伝」の世界―」をテーマとして、＜ペドロ岐部＞をめぐる作家論と、『侍』をめぐる二つの作品論から成っている。この時期の作品は、『黒ん坊』を除くと、小西行長、ペドロ岐部、山田長政、支倉常長といったようにいずれも「切支丹時代」に海外で勇躍した日本人の「評伝」である。つまり、「切支丹時代」にキリスト教と関わった日本人の「評伝」を描くことで、その人生の痕跡を辿り日本人にとってキリスト教がどのような意味を持っているのかを問い直しているのである。とりわけ、山田長政と対照的な生き方をした〈ペドロ岐部〉と、慶長遣欧使節としてローマまで渡った支倉常長を主人公とした『侍』はこの時期の特徴をよく表している。

第四部は、「「歴史小説」―「歴史群像」の世界―」をテーマとして、『女の一生〈一部・キクの場合〉』や『王の挽歌』をめぐる三つの作品論と、＜ペドロ岐部＞をめぐる作家論から成っている。この時期のほとんどの作品は、主人公を軸として様々な登場人物が交差する、いわば「歴史群像」とも呼ぶべき様相を呈している。例えば、『女の一生〈一部・キクの場合〉』の場合も、幕末から明治にかけての浦上四番崩れを背景として、主人公のキクと従姉妹のミツ、清吉と熊蔵、プチジャン神父とフューレ神父、伊藤清左衛門と本藤舜太郎といったように常に対照的な人物が配置されており、歴史を立体的に描いている。さらに、『侍』と『深い河』をつなぐ要となる『王の挽歌』に注目し、山本周五郎『赤ひげ診療譚』との比較や、キリシタン文学という観点から考察した。そして最後の歴史小説『女』にあらわれた〈ペドロ岐部〉の形象を考察した。

以上の四部構成による各作家論、作品論を通して本論文では「歴史小説」が遠藤文学において重要な役割を果たしていることを論証した。すなわち、「歴史小説」の序章である「手記」と「トポス」の問題、「弱者」と「強者」の問題を軸とした「切支丹物」の世界、海外に勇躍した日本人の痕跡を辿り「日本人とキリスト教」の問題を追及した「評伝」の世界、主人公を軸として様々な登場人物が交差する「歴史群像」の世界といったものである。これらの作業により、総体的な遠藤文学の見直しを図ることが可能となったのである。